

第三百五十六回 青葉会

平成二十七年十一月二十五日(木) 午後五時半〜九時 丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 豊田ゆたか 中野一灯

〈投句〉

中山芳博 山崎亜也 山内天牛  
小西弘子 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄  
渡邊盛雄  
赤田堅 安部眞希子 後藤保明 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 福島正明  
村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

☆ 裳裾より水貫ひある菊人形(川越の喜多院) 孤舟 (眞・猛・万・ゆ・灯・芳・正・青)

(☆↓「裳裾分け水を養ふ菊人形」)

八点

◎ 母が書く子の喪の葉書十一月

手術終へピンクのセーター羽織る妻

忠彦 (眞・猛・孤・青・天・三)  
盛雄 (そ・紀・忠・保・正・三)

六点

◎ 児ら走る崖線(はげ)の下道木の実落つ

(☆↓「木の実降る崖線の下道児ら走る」) (武蔵野公園)

紀久男 (万・孤・灯・隆・正)

人生に台本はなし日記買ふ

超然と枯葛まとふ樗かな

健介 (ゆ・隆・正・く・天)  
芳博 (堅・万・保・龍・天)

(☆…「蔓」は「葛」が佳いと思う「超然と枯葛まとふ老樗」)

四点

☆ 青空にぬくもり残し秋雨(しゅうりゅう)去る

(☆…「秋雨」の擬人化表現を避けて「青空に残る温もり秋雨去り」)

猛 (紀・万・龍・く)

☆ 菊届くレシピを添へて姉の文字

返り花遊ぼと呼びし友の家

忠彦 (猛・保・敏・隆)  
弘子 (眞・隆・亜・青)

☆ カラカラと参道駆くる朴落葉

(保…落葉の動きと音の表現がいい)

芳博 (万・保・敏・く)

☆ 岩組みの湯に脚ほぐす枯木星

(☆…中七はやや説明調なので省略して「岩組みの脚湯に仰ぐ枯木星」では如何?)

一灯 (万・ゆ・青・三)

☆ 考へぬ生きる意味など海鼠割く

(☆…「考へぬ」は「考へずして」と解釈して「海鼠割く生きる意味など考へで」)

正明 (紀・万・敏・芳)

三点

◎ 救急のサイレン響く夜寒かな

機関車がもみぢの中を登り来る

そらお (孤・允・く)  
全 (忠・灯・允)

☆ 牡蠣すすり三陸偲び酒銜(ふくむ)

(☆…語順を変えて詩意を通り易くする「酒銜み三陸偲び牡蠣啜る」)

猛 (堅・万・忠)

☆ 目覚ましを止めてまた寝る時雨かな

大寺の紅葉明りの奥書院

忠彦 (保・龍・亜)  
孤舟 (堅・万・芳)

(☆↓「紅葉照り閑(しづ)か大寺(だいじ)の奥書院」)

初しぐれ村の灯はやも点り初む

地球儀のぐるりと回り小鳥来る

全 (そ・灯・允)  
全 (允・正・三)

かいつぶり潜り夕日呼び戻す

後に蹴(こ)けば友も老いたり冬木立

全 (眞・ゆ・灯)  
恵洲 (龍・青・三)

☆ 琳派展秋色いそぐ東山

奥飛驒の馳走山菜新走

堂哉 (堅・龍・正)  
ゆたか (万・く・青)

(☆…中七の語順を変えて「奥飛驒の山菜美味(うま)し新走り」)

☆ 故郷(ふるさと)の柿軒に干し父偲ぶ

(☆…語順を変えて「父」を強める「父偲ぶ故郷(こきょう)の柿を軒に干し」)

◎ 苔庭の紅葉明りや時の鐘

☆ ◎ 白河の逆旅(げきりよ)に霰聴く朝(あした)

一灯 (孤・敏・ゆ)  
芳博 (万・孤・亜)

二点

☆ 時雨るる夜(き)プロ顔負まけの嘶聴く 天牛 (紀・万・敏)

(大滝長孝さんの落語二席：落語カフエ)

十一月歌舞伎座「十一世團十郎五十年祭」

☆ 襖絵は秋の七草成田屋さん 全 (紀・万・隆)

人乗せてゆるる吊橋谷紅葉

そらお (堅・天)

海老蔵長男勸玄お披露目(歌舞伎座)

☆ 冬うらら初お目見えに響動(どよめきて 紀久男 (万・允)

(☆：一番言いたいことを頭にもつてくること「響動めくや初お目見えの冬うらら」)

☆ 夕日影古民家庭に柿たわわ 猛 (そ・万)

(☆↓「古民家の庭柿たわわ夕日影」)

☆ 神社まで墓地事業とは神の留守 忠彦 (猛・芳)

木の葉散る薄い頭にさはるなよ

全 (猛・龍)

☆ テロを生む時代病めるや凍てる空 健介 (万・敏)

(☆：語順を変えて「凍空や病める時代にテロ生まれ」)

☆ 翅(はね)つひに展げぬ孔雀暮早し 恵洲 (眞・亜)

金秋の路傍山菜売る老女

ゆたか (万・天)

(☆：「路傍」↓「路辺に」)

☆ 水天宮白衣の巫子の紅葉映え 全 (そ・万)

(☆↓「水神や巫女の白衣の紅葉映え」)

◎ 金柑の色付き庭に鳥の影 全 (孤・そ)

校塔へひびくチャイムや黄落期

一灯 (孤・允)

◎ 冬木立明るく雨をまとひけり 芳博 (そ・孤)

北上す枕木毎に紅葉(もみじ)濃く

啓子 (万・隆)

(☆↓「北の旅枕木毎に紅葉積み」)

☆ 紅葉(こうよう)を縫いつけるごと滝の筋 全 (紀・ゆ)

焼箸を折りに黄の色暫し賞(めづ)

亜也 (忠・万)

☆ (☆↓「焼芋を折るやその黄を暫し賞で」)

☆ ムール鍋無造作に入るセルリかな 全 (紀・万)

足踏みし落葉の厚み確かめり

そらお (芳)

☆ ノーサイドラガー雀躍り挙上ぐ 紀久男 (万)

宙乗りも殺陣(たて)も大受け冬の汗

全 (万)

(猿之助・巳之助らの「ワンピース」)

☆ 青きまま枯蟪蛄の最期かな 全 (忠)

改葬へ集ふ縁者に紅葉照る

猛 (天)

☆ ふるさとの城より眺む瀬戸の秋 全 (そ)

国会のシユプレヒコール時雨来る

弘子 (垂)

☆ 片時雨駆け抜けし影イタチらし 堂哉 (万)

ピバルデーの四季に更けゆく炉火明り

一灯 (隆)

☆ 朽ちんとてなほ留まりし姫椿 芳博 (堅)

実石榴にシエハラザードが物語る

正明 (垂)

☆ 富士山の湧き水で炊く今年米 昇 (隆)

紅葉が山駆け下りるとISS 啓子 (猛)

(油井宇宙飛行士からの報告)

☆ 晩秋の妻の奥津城(おくつき)訪へり 規雄 (紀)

☆ 女連れワイン選ぶも菓喰 亜也 (三)

牛鍋をカウンターで喰ふワンコイン

全 (灯)

☆ 根廻しはすべて爺婆ハローワイン 天牛 (忠)

筆で書く香典袋文化の日 全 (眞)

一点

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

平成二十七年十一月句会報

一 今回は、選者の孤舟さん始め10名出席。投句9名。  
小生持参の「俳句あるふあ」12月、1月号（松浦加古さんの昭和記念公園吟行掲載。カラー七頁）。  
孤舟さんの「爽樹」11月号、盛雄さんの「季流」10月号、そして師走の末広亭と正月の歌舞伎座チラシを回覧。

孤舟さん持参の「沖」創刊45周年記念パーティーに供された三年秘蔵酒（千葉の守屋酒造「舞桜」に「沖」のラベル）、亜也さんからの「真澄ひやおろし」（長野）、一灯さんのボジョレ・ヌーボー、芳博さんからの鹿児島焼酎「赤兎馬（せきとば）」、小生の伊勢銘菓「絲印（いといん）煎餅」。そして天牛さん寄贈のレーズンウイツチ（小川軒）と小生のジャック・ダニエルの取り合わせが好評で酒・ビール・つまみをどんどん追加。いつもの盛会となりました。

万里子先生の選評・添削の素晴らしさ、来春にでもご一緒する機会が待たれること、加古さんが名誉主宰になられたことなど話題にしつつ、猛さんの披露で快調に進み、御覧のように忠彦さん、盛雄さん、芳博さんが高得点でした。

二 関係者近詠

古都の秋ナラは韓語の国のこと	万里子	負けてなほ漢の美学秋深む	盛雄
団栗に土踏まず乗り坂長し	全	無法者のはびこる兆し神無月	全
帰燕ゆき瓦葺き多き棚田村	全	行く秋や米朝偲ぶ弟子・最良	紀久男
金縁（きんぶち）の夕焼雲へ母郷行	全	行く秋や卯建（うだて）を今に和紙の里	全
生家には曾祖母口伝の菊枕	全	相性良き月こそ地球の伴侶なる	健介
庭柿の赤み深まり旅帰り	全	草食系恋に縁なく秋の行く	全
鍵穴を探し当てるや夜蟬止み	全	盗掘をまぬがる古墳や草紅葉	全
秋晴れに通勤の靴奮発す	眞希子	——「きさらぎ句会」11月	
強行採決の特大見出し秋暑し	全	三つ四つ淡きひかりの返り花	允章
立入禁止の廊奥深し運動会	全	靴音のことさら高し今朝の冬	全
夜爪飛ぶ居間の闇より秋蚊出づ	全	小春日や京を彩るたらし込み	堂哉
花活くる奉仕花屋に買ふ稲穂	全	青首の二列横隊大根畑	全
大芝生鴉二點に秋の雨	弘子	ひとけ はけ	
黄泉へ行く如く隧道秋の風	全	人氣なき崖線の下道返り花	紀久男
勤しめよ詩せよ恋せよきりぎりす	全	小鴨らの陸む小声や細（ささ）ら川	全
家中の力持ち出し胡桃割る	全	とりどりの落葉踏み詠む崖線小道	全
身に入むよ孤老漂流せる譚	青史	（多摩句会吟行）	
告ぐべきの数多告げ得で墓参終ふ	全	会ふ人に会へしよろこび朝ちろる	松浦加古
小海線降りていちまい新蕎麦を	全	地続きに洪水のあり鱗雲	全
菜を間引く一言詫びを入れてより	全	よく笑ふひと眩しくて真弓の実	全
雨止まずやらずのままの盆の市	全	魂の揺れはじめたり初尾花	全
白滝を集めて激し奥入瀬は	忠彦	晴天を呼ぶ秋蝶のはばたきに	全
		仲秋の上簇に繭光りをり	全

——「俳句あるふあ」12、1月号  
来し方に付箋のいくつ鱗雲 丹野敦雄  
——「俳句」12月号 小笠原和男選  
（推薦句の筆頭。選評省略） 以上

平成二十七年十二月十六日

紀久男記